形態の多義性について

2016 年 6 月 11 日
小幡道昭

『資本論』の価値形態論では「形態」というタームが多義的に使われている。基本命題は「ある商品の価値対象性の現象形態は、別の商品の自然形態である」ということになる。図 1 の捩れた現象を Quid Pro Quo という。

‖**A**| 商品は、使用価値または商品体の形態 ^{a} で、鉄、リンネル、小麦などとして、この世に生まれてくる。これが商品のありふれた 自然形態 ^{a} である。とはいえ、商品が商品であるのは、それが二重のものであり、 使用対象 ^{x} であると同時に価値の担い手であるからにほかならない。だから、商品は、自然形態 ^{a} と 価値形態 ^{b} という二重形態 ^{c} をもつ限りでのみ、商品として現われ、言い換えれば、商品という形態 ^{d} をとるのである。

商品の 価値対象性 ^{y} は、どうつかまえたらいいかわからないことによって、寡婦のクィックリーと区別される。商品体の感性的にがさがさした 対象性 ^{x} とは正反対に、商品の価値対象性 ^{y} には、一原子の自然素材もはいり込まない。だから、一つ一つの商品を好きなだけひねくり回しても、それは、価値物としては、依然としてつかまえようがないものである。··· 実際、われわれは、諸商品の交換価値または交換関係から出発して、そこに隠されている諸商品の価値の足跡をさぐりあてた。いまや、われわれは、価値のこの 現象形態 ^{b} に立ち返らなければならない。(K.,I. S.62)

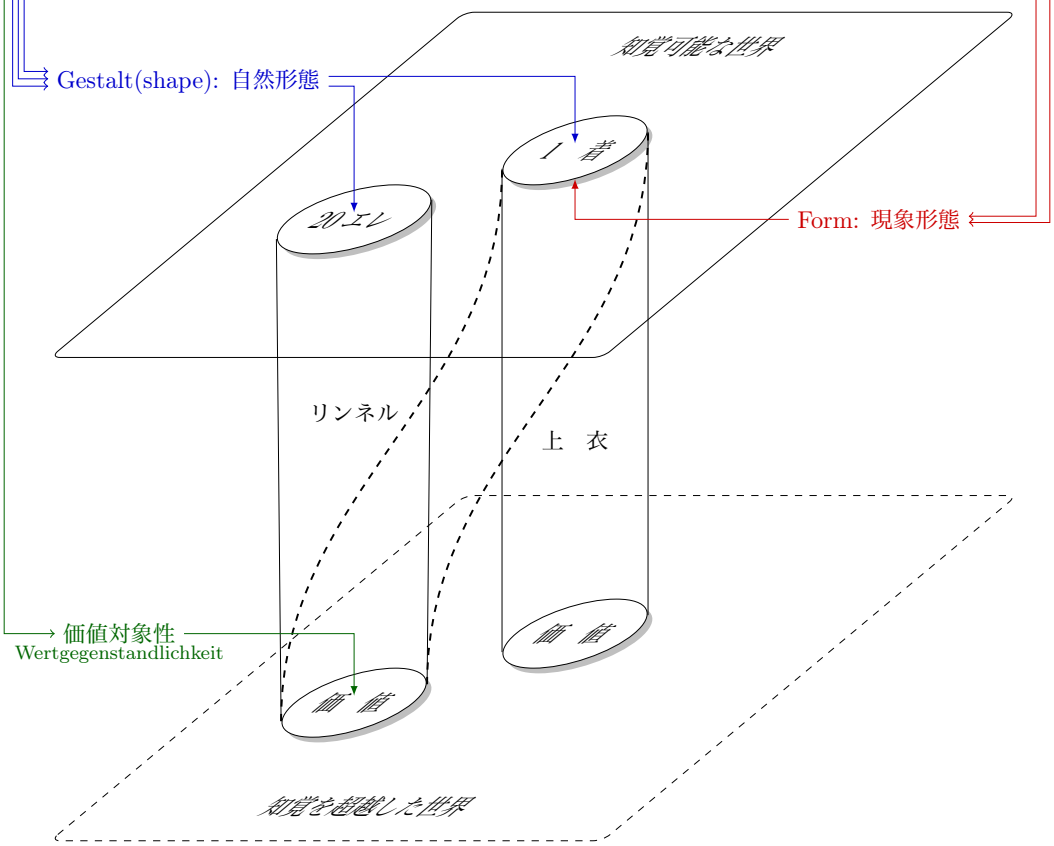

図 1　現象形態と自然形態